

#### 4 市庭古墳 (PLAN 19, PL. 33~35, Fig. 23)

市庭古墳 SX500 は、旧字「市庭」<sup>いちには</sup>にあり、現在の平城陵を後円部とする復原全長 250m の南向きの前方後円墳である。後円部復原径130m、前方部幅160m、周囲に、幅40m前後、深さ 1.5m の周濠をめぐらしている。

- \* 市庭古墳の前方部は、平城宮造営に際して破壊削平され、周濠は埋めたてられている。そして、旧前方部・旧周濠上の全面にわたる整地土上に、奈良時代の遺構が存在する (Fig. 9・10) ため古墳の広範囲な調査はおこなわず、前方部東南隅 (PLAN 19, PL. 34-1・2)・外堤西南隅 検出部分 (PL. 35-4)・南面外堤 (PL. 35-2)・東面外堤 (PL. 34-3) を、それぞれ部分的に調査し、あわせて周濠の底を一部検出するにとどめた。



Fig.23 市庭古墳復原図 縮尺1/2500

墳丘 墳丘は、本来、3段築成であったろうが、検出したのは、最下段の基底部のみである。前方部東南隅近くの東斜面・南斜面においては、基底部をつぎのような過程で造成していることを確認した(PLAN 19 断面図)。まず、地山を掘りさげて60度前後の急斜面を作り、つぎに含礫暗褐色砂土が黄褐色粘質土を盛って25度前後の緩斜面を形成し、墳丘の基方形とする(第1次盛土)。この上に暗灰色粘質土(厚さ10~30cm)を覆う(第2次盛土)。葺石には自然石をもちい

葺石 墳丘基底線にそって大石(長さ40~50cm)を一行にならべたのち、斜面に、小さめの石(長さ10~20cm)を葺いている。前方部東南隅から北に向う東斜面、およびその対岸の東面外堤においては葺石を葺くにあたって、あらかじめ墳丘の稜線上および斜面の2~2.5m間隔毎に、人頭大の石を下から上へと1列に並べて区画線とし、各区画毎に石を敷きつめる方法をとっていることが確認できた。

埴輪はすべて破片として、葺石上に散乱するか、周濠内に落ちこんだもののみであって、原位置にすわっているものはなかった。

周濠 周濠は深さ1.5m、前方部前面においては、上端幅41m、下端幅35mである。底面はほぼ水平で素掘りのままである。底には、有機質をふくむ黒色粘質土層(厚さ30cm)が堆積している。この層には、埴輪破片を含むほか、マツの自然木が横たわっていた。斧で切り倒し、枝をはらった痕跡をとどめており、宮造営にあたって、伐採・投棄されたものとみられる。黒色粘質土層の上には、含礫赤褐色土などの整地土層(厚さ120cm)がのっている。この層は埴輪破片を少量ふくむのみで他の遺物をふくんでおらず、宮の造営時に、一度に埋めたものであることをしめしている。

外堤斜面は、墳丘基底斜面と同様の傾斜(25度前後)をもち、それと同規模の葺石を葺いている。精査していないが、墳丘基底の築成と同様、2回の盛土で仕上げたものと推測している。

墳丘の復原 市庭古墳の全体の形・規模を現状で復原してみた(Fig. 23)。

前方部の規模から考えると、市庭古墳の後円部は、現平城陵よりもひとまわり大きかったと考えられる。平城陵の周囲には民家が密集しており、いま、その原形を正確に知ることは出来ない。しかし平城陵の北50mにある円弧の一部をみならずとみられる畦畔を、周濠外端の痕跡と見、前方部前面と同じ周濠の幅を考えることによって、後円部の径を算出した。こうして復原した全体の形は大阪府墓山古墳の形に近い。なお、造り出しの有無は遺構の上では確認していない。しかし神明野古墳、および佐紀盾列の諸古墳のウワナベ古墳・コナベ古墳・磐之媛陵と同様、造り出しをそなえていたとみるべきであろう。

周濠掘削排水用溝

外堤南辺の西端から東50mの位置からはじまって西南に流れる溝SD503(PL. 35-3)は、底面は始まりの部分で周濠の底面より20cm深い。この溝は、周濠掘削から墳丘・外堤築成にいたる間の湧水を排除するための溝であって、外堤が完成した段階では、溝の始まる部分を黒色粘土で埋め戻し、その上に葺石をふいている。なおこの溝はさらに約150m続いて、佐紀丘陵の支谷にそそぐものと考えられる。

1) 市庭古墳の後円部径、前方部後長、前方部前長の比率は、約6:1:3で、前方部両側線の交点は、後円部外堤の後方にある。上田宏範『前方後円墳』学生社、1969年、pp. 60. 付表。

2) 神明野古墳については、『平城宮報告Ⅲ』で報告したが、その後、第73次調査で、墳丘東側のくびれ部に造り出しのあることを確認した。『年報1972』pp. 26。